

【人格をつなぐのは、『ことば』～ かしこい『ことば』は 叡智からくる】～

2026年6月29日は『朝早くまだ暗いうちに起きて(マルコによる福音書 1章35節)』であった。雨が降っていた。6月27日は『東久留米駅 → 秋津駅 → 徒歩 → 新秋津駅 → 府中本町駅 → 稲田堤駅 → 徒歩 → 京王稲田堤駅 → 京王多摩センター駅』から【1周年記念『がん哲学外来 オリーブ多摩カフェ』(主宰:オリーブ多摩カフェ 猪貝幸恵氏)(多摩ニュータウンキリスト教会に於いて)の講演会】に赴いた。6月28日は『ひばりが丘駅 → 横浜駅 → 辻堂駅』から神奈川県茅ヶ崎東教会での『聖書とがん～ 私たちにできること～』(添付)の講演(主催:田中美穂氏)に赴いた。『雨降りの3連チャン症候群』である。

【『雨が降ったときに傘をさすか、レインコートを着るか、家に入ってしのぐか。その選択は本人の自由意志』 & 『人間はいつも判断の分かれ道に立っている』 その答えを選ぶのは『本人の自由意志』 & 『新渡戸稲造(1862-1933:盛岡)と同じ岩手県出身で、共に1933年に逝去している宮澤賢治(1896-1933:花巻)の『雨ニモマケズ』(宮澤賢治作): 雨にも負けず 風にも負けず 雪にも夏の暑さにも負けぬ —— あらゆる事を自分を勘定に入れずに 良く見聞きし判りそして忘れず—— 東に病気の子供あれば 行って看病してやり 西に疲れた母あれば 行ってその稲の束を背負い 南に死にそうな人あれば 行って怖がらなくても 良いと言い 北に喧嘩や訴訟があれば つまらないからやめろと言い —— そういう者に 私はなりたい】の実践の日々である。

レイチェル・カーソ(1907-1964)の『沈黙の春(Silent Spring)』(翻訳 青樹築一/南原実:1930-2013)(添付)の最終章『べつの道』の【私たちは、いまや分れ道にいる。—— どちらの道をとるか、きめなければならないのは 私たちなのだ。】 想えば、筆者とwifeは、毎年、南原実先生宅でクリスマス会に伺ったものである。奥様が作って頂いた美味しい夕食を食べながら学びの時であった。『南原実は、ドイツ文学者。東京大学名誉教授。父は東京大学総長を務めた法学者の南原繁(1889-1974)』である。『未来を生きる君たちへ』(南原実著 2005年9月10日発行;添付)を頂き熟読したものである。【ふたりの人格をつなぐのは、コトバなのだ。—— コトバは、ついには、マナザシのなかへと昇華する。おろかな考えは偶然が運んでくるが、かしこいことばは 叡智からくる。】 まさに『最も必要なことは、常に志を忘れないよう 心にかけて記憶することである』(新渡戸稲造)の復習である。